

当研究所からは釜野さおり（人口動向研究部第2室長）、余田翔平（人口動向研究部第3室長）、菅桂太（人口構造研究部第1室長）、筆者の4名が参加し、以下の研究発表を行った。

- Daiki Hiramori, Saori Kamano and Takeyoshi Iwamoto "Are All of the "Undecided" Sexual/Gender Minorities? A Queer Demographic Analysis of an Experimental Study to Improve Sexual Orientation and Gender Identity (SOGI) Questions"
- Man Yee Kan, Muzhi ZHOU, Kamila Kolpashnikova, Ekaterina Hertog, Shohei Yoda and Jiweon Jun "How Do Elderly People Spend Their Time? Gender Gaps and Educational Gradients in Time Use in East Asian and Western Countries"
- Keita Suga "Lowest-Low Fertility in Singapore: Current State and Prospects"
- Takashi Inoue and Nozomu Inoue "An Evaluation of the Risk of Becoming Uninhabited at the Small Area Scale by Logit Models: Using Projected Population of Japan"

なお、2022年大会は米国ジョージア州アトランタで4月6日～9日に開催予定である。

（井上 希 記）

第32回 REVES 国際会議

2021年5月26日（水）～28日（金）、オンラインで第32回 REVES 国際会議がオンライン開催された。REVES とは、フランス語で「夢」であるが、Réseau Espérance de Vie en Santé（健康寿命ネットワーク）の頭文字をとったものであり、欧米の健康寿命研究者を中心に1995年に結成され、その後ネットワークを世界に広げ、定期的に会合が開かれている。昨年は中国・杭州で開催予定であったが新型コロナウイルス流行により延期され、今回のオンライン開催となったものである。日本を含めたアジア、アメリカ、ヨーロッパからの参加者があるため、開催時間は日本時間22時から24時までの2時間と短く、3日間かけて行われた。

筆者は、別府志海・社人研室長、尾島俊之・浜松医科大学教授、齋藤安彦・日本大学教授との共著で、国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合いに関する調査」に含まれる、国際的に広く用いられている日常生活の支障に関する質問（GALI）を用い、健康寿命の国際比較に関する報告を行った。この報告はピッチ・セッションで行ったが、これはスライド1枚、3分の報告が総勢15名により行われる、という形式である。会議時間の制限によりとられた解決策ではあるが、逆に多くの報告が短時間で要点のみ聞ける、という意味で新鮮であり、報告者が壇上に上がる時間などを考慮しなくてもよいオンラインならではの形式であった。

健康寿命に関する会議ではあるが、新型コロナウイルスの影響に関する報告はなく、教育と健康や、健康寿命算定の方法論などの報告などが目立った。会議の内容は <https://www.reves2021.org/> に掲載されている。

（林 玲子 記）

日本人口学会第73回大会

日本人口学会第73回大会は、2021年6月5日（土）～6月6日（日）に東京大学を開催校・共催としてオンラインで開催された。大会プログラムは以下の通りである。第1日には「生物人類学にお

ける人口研究の現在」と題したシンポジウムが行われ、生物人類学と人口学の融合領域に多くの参加者が関心を寄せた。また、小島宏会長（早稲田大学）による「新旧のマルサス主義的実践と他の生殖関連要因」と題された会長講演が行われた。

第1日 2021年6月6日（土）

組織者・座長：小西祥子（東京大学）

討論者：佐藤龍三郎（中央大学）

- 1) 赤川学・小西祥子・仮屋ふみ子（東京大学）・森木美恵（国際基督教大学）「日本人の性行動の経時的变化」
- 2) 森木美恵（国際基督教大学）・小西祥子・赤川学・仮屋ふみ子（東京大学）「男性の性行動と文化的な不妊について」
- 3) 小西祥子（東京大学・ワシントン大学）・山崎一恭（筑波学園病院・山王病院）・猪鼻達仁（山王病院・国際医療福祉大学）・内田将央（筑波学園病院）・仮屋ふみ子（東京大学）・岩本晃明（山王病院・国際医療福祉大学）「男性の生殖機能と内分泌かく乱物質曝露との関連」

自由論題 A-2 「国際②」

座長：津谷典子（慶應義塾大学）

- 1) 西川由比子（城西大学）「インドにおける高齢化の進行と地域格差」
- 2) 松田浩敬（東京農業大学）「サブサハラ・アフリカにおける世帯構成と栄養摂取：ルワンダ共和国東部州の農村部を事例に」
- 3) 菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）「都市国家シンガポールにおける人口変動の民族格差」

自由論題 B-1 「世帯」

座長：萩原潤（宮城大学）

- 1) 余田翔平（国立社会保障・人口問題研究所）「社会調査における多世代データ」
- 2) 斉藤知洋・岩澤美帆・余田翔平（国立社会保障・人口問題研究所）「回顧式調査を用いた子世代の家族歴データの構築」
- 3) 松浦司（中央大学）「One-Person Households and Public Assistance in Japanese Elderly: An Analysis Using Prefectural Data」

自由論題 A-3 「国勢調査」

座長：川崎茂（日本大学）

- 1) 清水昌人（国立社会保障・人口問題研究所）「国勢調査の基準人口を用いた年齢不詳の配分」
- 2) 阿向泰二郎（総務省統計局）「令和2年国勢調査の公表計画及び人口推計（補間補正方法）の見直しについて」
- 3) 廣嶋清志（島根大学）「国勢調査像の形成過程—高橋二郎にみる」

自由論題 B-2 「結婚・家族」

座長：平井晶子（神戸大学）

- 1) 打越文弥（プリンストン大学・院）・ノリーンゴールドマン・ジェームズ M レイモ（プリンストン大学）「Revisiting the Relationship between Marriage and Health in Japan」

- 2) 佐藤一磨 (拓殖大学) 「夫婦関係の悪い結婚と未婚, どちらがより健康度を低下させるのか」
- 3) 江天瑤 (お茶の水女子大学・院) 「夫婦の家事分担における日中比較一家事労働の時間から」

シンポジウム「生物人類学における人口研究の現在」

組織者・座長: 梅崎昌裕 (東京大学)

- 1) 梅崎昌裕 (東京大学) 「趣旨説明: 生物人類学における人口研究の現在」
- 2) 富田晋介 (名古屋大学) 「東南アジア農村における乳幼児死亡の小集団人口学」
- 3) 長岡朋人 (青森公立大学) 「古人骨に基づく人口研究の現状と課題」
- 4) 蔦谷匠 (総合研究大学院大学) 「過去の授乳期間と出生力」
- 5) 井原泰雄 (東京大学) 「適応論的人間観と出生率の低下」

会長講演

小島宏 (早稲田大学) 「新旧のマルサス主義的实践と他の生殖関連要因」

第2日 2021年6月6日 (日)

自由論題 C-1 「移動①」

座長: 井上孝 (青山学院大学)

- 1) 佐藤廉也 (大阪大学) 「焼畑民は生涯どれだけ移住するのか？」
- 2) 津谷典子 (慶應義塾大学) ・黒須里美 (麗澤大学) 「近世東北農村における人口移動のパターンと要因」
- 3) 永井恵子 (総務省統計局) 「新型コロナウイルス感染症の流行と国内移動者数の状況」

企画セッション①「長寿・健康研究の現状と展望」

組織者: 石井太 (慶應義塾大学)

座長: 是川夕 (国立社会保障・人口問題研究所)

討論者: 門司和彦 (長崎大学)

- 1) 林玲子・別府志海 (国立社会保障・人口問題研究所) ・石井太 (慶應義塾大学) ・篠原恵美子 (東京大学) 「日本における複合死因の分析」
- 2) 大津唯 (埼玉大学) 「死因簡単分類別の長期時系列死因統計の再構築」
- 3) 石井太 (慶應義塾大学) ・別府志海・菅桂太 (国立社会保障・人口問題研究所) 「日本版死亡データベースの地域分析・死因分析への拡張・応用」
- 4) 別府志海 (国立社会保障・人口問題研究所) 「主観的健康観と疾病の関係からみた健康期間の分析」

自由論題 C-2 「移動②」

座長: 佐藤廉也 (大阪大学)

- 1) 小坪将輝 (東北大学・院) ・中谷友樹 (東北大学) 「ARDL モデルによる日本の国内人口移動率の低下に関する分析」
- 2) 中川雅貴・小池司朗 (国立社会保障・人口問題研究所) 「夫婦の出生歴と居住地移動—人口動態調査出生票を用いた分析—」
- 3) 奥田純子 (北陸大学) 「県外進学移動および初職時 U ターン移動の要因分析」

企画セッション③「新型コロナ感染拡大と人口動態：何が分かり、何が起きるのか」

組織者：岩澤美帆（国立社会保障・人口問題研究所）

座長：小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）

討論者：井上孝（青山学院大学）

- 1) 林玲子（国立社会保障・人口問題研究所）「国際的・長期的視点からみた新型コロナウイルス感染症の人口への影響」
- 2) 別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）「死亡・死因と新型コロナ」
- 3) 岩澤美帆（国立社会保障・人口問題研究所）「新型コロナウイルス感染拡大期の婚姻・出生への影響」
- 4) 小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）「新型コロナウイルス感染拡大に伴う国内人口移動傾向の変化」
- 5) 是川夕（国立社会保障・人口問題研究所）「新型コロナ・パンデミックはグローバルな人の移動の流れを変えたのか？」

自由論題 C-3「人口と政策」

座長：森木美恵（国際基督教大学）

- 1) 長谷川普一（新潟市都市政策部 GIS センター）「地方都市における人口減少局面の土地利用」
- 2) 大塚友美（日本大学）「小日本主義時代の人口政策の変遷」
- 3) 松田茂樹（中京大学）「子育て支援の拡充と増税が出生意欲に与える効果—ヴィネット調査を用いた要因研究」

自由論題 D-1「健康・医療」

座長：中澤港（神戸大学）

- 1) 佐々木昇一（神戸大学）「コロナ禍におけるテレワーク実施による労働生産性、年取、メンタルヘルスに与える影響」
- 2) 加藤承彦（国立成育医療研究センター）・高畑香織（湘南鎌倉医療大学）「不妊治療のストレスの原因—自由記載欄のコメントの分析—」
- 3) 永井克彦（株式会社 JMDC）「労働者のがん罹患率の年次推移」

自由論題 E-1「人口モデル」

座長：清水昌人（国立社会保障・人口問題研究所）

- 1) 原俊彦（札幌市立大学）「第1と第2及びポスト人口転換の統合モデル」
- 2) 堀口侑（慶應義塾大学・院）「日本のモデル生命表の開発と地域別生命表推定への応用」
- 3) 逢見憲一（国立保健医療科学院）「2000年～2015年のわが国年齢調整死亡率の死因構造変化とその死因統計上の要因」

自由論題 D-2「人口減少下の地域」

座長：原俊彦（札幌市立大学）

- 1) 衣笠智子（神戸大学）・豊澤圭（神戸大学・院）・藤岡秀英（神戸大学）・山岡淳（大阪成蹊大学）・田村穂（神戸大学・院）「中山間地域におけるソーシャル・キャピタルと住民の健康—兵庫県姫路市山之内地区の住民アンケートに基づく計量研究—」

- 2) 安田公治 (青森公立大学・神戸大学)・衣笠智子 (神戸大学)・衛藤彬史 (兵庫県立人と自然の博物館)「農家の健康状況が地域農業に与える影響についての計量的研究—兵庫県養父市における農家アンケート調査の事例—」
- 3) 熊谷文枝 (杏林大学)「人口減少と地域力—消滅可能性自治体の事例から—」

企画セッション④「人口からみた近代移行期の日本」

組織者：研究企画委員会

座長：黒須里美 (麗澤大学)

討論者：斎藤修 (一橋大学)・鈴木透 (ソウル大学)

- 1) 鬼頭宏 (上智大学)「移行期における出生率の動向」
- 2) 逢見憲一 (国立保健医療科学院)「近代移行期から第二次世界大戦前 (中) 後の死亡・死因研究に関する展望」
- 3) 高島正憲 (関西学院大学)「近代移行期における都市人口」
- 4) 平井晶子 (神戸大学)「近代移行期の世帯と家族」

自由論題 D-3「地域人口」

座長：高橋眞一 (新潟産業大学)

- 1) 井上希 (国立社会保障・人口問題研究所)「小地域データを用いた市町村合併による過疎地域への影響の検証」
- 2) 鎌田健司・小池司朗・菅桂太 (国立社会保障・人口問題研究所)・山内昌和 (早稲田大学)「都道府県別にみた人口増加率の要因分解：1950-2015年」
- 3) 丸山洋平 (札幌市立大学)「地域人口推計における Child Woman Ratio の分母年齢設定」

(岩澤 美帆 記)

第5回アジア人口学会大会

2021年8月3日(火)～5日(木)、第5回アジア人口学会大会が、インドネシア国家人口家族計画委員会(BKKBN)、ガジャマダ大学との共催で、オンライン開催された。昨年計画されていたものが新型コロナウイルス感染症流行により延期されたものであるが、結果的にインドネシアで一番感染が拡大し重症化している時期に開催されることとなった。しかしながら、会議は滞りなく粛々と開催された。

会議は3日にわたり、2つの全体セッション、30の平行セッション、ポスター又は事前録画セッション、開会式・閉会式から構成され、アジア太平洋地域各国および欧米から多くの参加があった。セッションは、定番である出生・リプロダクティブヘルス、健康・死亡、国内・国際移動、人口データ・分析手法に関するものに付け加え、幸福、生活の質、労働力、環境に関するものもあり、高齢化に関するセッションも多かった。

今大会は、ZOOM形式がウェビナーでなくミーティング形式で設定、つまり、報告者のみならず参加者も直接コメントや発言できる形式であり、活発な議論が行われた。また、これまでのアジア人口学会大会では、報告者が出張できないために欠席する事態が多かったが、オンラインで行うことで、経済的な負担を抑え、多くの人が参加できるようになったことは進歩である。今後新型コロナウイルス感染症が終息したとしても、ハイブリッドで会議が開催されることが期待される。(林 玲子 記)